

大学放浪記 (9)

伊藤信孝

マエジョ大学客員教授・再生可能エネルギー学部

長年タイの大学を放浪する間に、どうしても理解できないことが心に引っかかっていた。それはグループでの共同研究や、国際共同研究プロジェクトと銘打っていても、よくよく注意して見て見ると、どう見てもその様には見えない。共同研究、コラボ、ジョイント・プロジェクトというのは言葉だけで、その実、協力して活動しているようには見えない。あたかも共同、協力というのは予算を取るだけの組織にしかみえない気がして成らない。長年この疑問に悩み続けて来たが、同年配の有人知人のいくらかからその本音を聞くことができた。必ずしも筆者の思いが全てではないが、あたらずとも遠からずというところであろうか。類似の内容は本シリーズでもいくらか既述したが、「やはりそうだったのか」と頷く結果に至ったことは予想が当たっていたという奇妙な喜びとともに、「これでは駄目だ」という失望感の狭間で複雑な気持ちにもなった。タイの大学の研究の多くは、フィージビリティ・スタディ (Feasibility study)、あるいはケース・スタディ (Case study) が多く、タイ独自の技術を生み出すほどのオリジナリティに満ちた研究論文は少ないと言われる。なる程その様な目で見てみると、うなずける部分も多い。では何故その様なところで研究活動が足踏みしているのか、と言う新たな疑問が湧いてくる。いつかはこの疑問に答えるべく、相当の答えを見つけ出してやると思いつつ十余年が過ぎた。ようやくその答えが分かってきた。それは基本的に大学の教員、研究者の基本的姿勢が「個人」優先で有り、自らが予算を自由に仕切れる「組織の長」でありたいと考え、共同研究プロジェクトの一員として名前を置いて居ても、非協力的と思われる姿勢、挙動が表面に現れていることから想像に難くない。究極は自分で自由に利用できる予算の獲得が前面に出てくるから、グループで大型予算を獲得しても、配分された後は自らの自由にしたいと言う姿勢が色濃く表面に出てくる。そして、自分がやっている事への他人や同僚からの質疑には極めて逃避的で、いろいろ理屈をこねて議論や話題をはぐらかす。

例えば、他大学の共同研究で得たデータの数値と同様の計測器を作ったという人物の計測器での測定値に大きな差がある、などと質問しよう物なら、予定した現地調査には行かないと即座にキャンセルして議論の場から逃げる。予定していた航空券までもキャンセルしてである。そしてその後は2度とそうした質問や意見を言うことはできない雰囲気を作り、防衛壁を作って寄せ付けない。講義に於ける分担においても、相互に話合って内容を調整するとか、更なる改良を目指すとか言う姿勢は全く視られない。あたかも直接会って話をする機会を持つと、自分のやっていることが多くの人に分かるので、そうならないようにしたいと言う姿勢にも見える。あるいは自分の考えを盗まれたくないという警戒的な行動にも見える。しかし、どれほど高度な事を自分はしているかと言う事は棚に上げての

話である。ではどこで本人がやったことを他の人は知り得るのか、と言うと、時には永遠に分からないと言う場合もある。このような状態になると、発表されたデータの信用ができない、信用ができないデータを使って、議論をしても恥の上塗りであり、研究全体のレベルや質を落とす。共同研究では少なくとも最後にグループ全員が一堂に会し、テーマ別にプレゼンをする機会を持つ（あるいはこれもすり抜ける者もいるが）からいくらかはその人の仕事の内容、結果を知ることができるが、それが一つの講義の授業分担となれば、事前の打ち合わせもしなければ、分量、講義回数だけを相応に配分し、内容は各自に任せる、進行過程状況の報告もなければ接触も全く無いと言う、破格の極めて稀有な体制での対応に全く疑問も持たず、学生への対応の配慮もない、と言う「これが大学の教員？」あるいは「これが大学の授業なの？」、「とても大学の講義には見えない」というレベルの低い類いの講義もある。では「何故このような考え、姿勢、あるいは挙動」が誰からも何ら指摘されずにまかり通るのか、と言えば簡単である。誰も言わないからである、講義は所定の時間数と回数に合わせた内容を、シラバスに記載し、公表されているが、その内容に100%沿った形で講義が執り行われているかどうかとなると、その検証は難しい。私学ならともかく、国公立の大学では一度職を得た教員がやめさせられることはない。本人が昇格や昇級への高望みを為なければ何時までも定年まで居座ることができる。今後どのような研究をすれば自国の国益や社会の利益に沿った貢献になるのか、などと考えて居る者は残念ながら見当たらない。新しい事をいち早く取り入れるのは速いが、そこで終わりというケースが多い。いわゆる新しい事、あるいは新しい物への関心、あるいは何時も新しい事を先んじてやっていると言う見栄にも似たプライド(?)の維持にも為た主張で終わっている場合が多い。所詮勉強のレベルで終わり、その後の展開への進展がないから、いつまで経ってもオリジナルな製品もアイデアも出てこない。「子は親の背中を見て育つ」と言う諺があるが、教員自らがその様な姿勢や振る舞いでは学習する学生は師を超える事は少ない。余程の高いモチベーションと価値観がある場合を除いて……。あるいは指導教員がずば抜けた反面教師でなければ、である。

あの大学は教員は余り優秀ではないが、学生は大きく異なり優秀であると言う例もなくはないが、一般的には学んだ教員を超える学生が少ない。もし総出内のなら、大学卒業後の学生自身の自助努力、あるいは自己への覚醒、別の人との出会い等による場合が多い。政府は良くないが、国民は良いと言うのも良く聞かすが、それは教育の怖さを知らぬ者の意見である。極めてしっかりした考えを持って居ると言う評価であっても、間違っただけや嘘の教を学んでいたのでは無意味であり、出てきた成果の利用目的を誤っても評価されるどころか批難されるのは当然である。如何なる理由かはともかく、タイの大学の教員や研究者が、共同研究を積極的に考えて居るかについて筆者は極めて懐疑的である。もちろん極めて協力的でチーム・ワークの重要性を認識している管理運営能力に秀でた教員がいることも熟知、招致しているが、そうした人の割合は極めて少ない。そのような大学の内状にも関わらず、次の年度予算申請に、おそらく「勉強」のレベルで終わるのであろうプロ

プロジェクトが堂々と申請されてくる事には驚きである。予算が認可され、交付されても誰がその研究をするのかと少なからず皮肉にも似た目で見つめるしかない場合も多い。多額の予算を獲得することが、高い評価を得ると言う評価基準のもとでは予算獲得が目的になり、研究成果の社会的寄与、貢献にはならないから国力も上がらない。最低限自国で生産、管理しなければ成らない基本的な資材まで、他国に依存しなければならないことになる。一時的には許されるが、未来永劫他国に依存し続ける事になってはならない。この状態に満足し、今後も継続して行くのか、あるいはこれでは駄目で他国に依存しない成長を目指すのかはその国に暮らす国民、またその政府が決めることで有るから口を挟む余地はないが、いささか残念の極みである。「公務員が国を滅ぼす」と言う既述は過去にもしたかと記憶するが、その類いの自覚がそろそろ出てきて欲しいものである。それには大学の師が模範となる「背」を弟子に見せ、強力なリーダーシップで高いモチベーションを引き出し、人材開発育成をする姿勢が必要である。個人の好き嫌いで行う研究も否定はしないが、予算の出処が公的資金とも成れば費用対効果、コストダウン、成果についての報告の義務は表裏一体である。筆者は「人生は自らが成すべきミッションを捜し求め続ける旅」のようなものであると書いて来た。強制する積もりはないが、逆に「何の為に生まれてきたのか、何の為に生きるのか」を自らに問う姿勢があってもよいのではないか。国民にとって税金は安い方が良いし、多くは減税を望んでいる。増税により多額の予算を確保する事が高い評価につながるというのは間違っている。できるだけ少ない、安い経費で、質の高い成果を提供することがいずれの社会においても共通した認識である。それこそ適正技術で満たさなければ成らない条件のひとつである、「社会的受容」である。いくら優れた世界で唯一の技術でも、破格の値段では買う人は居ない。誰もが入手できる価格が設定されていなければ普及はしない。かつて在職時代に企業の人から聞いた発言に「予算無視、時間無視、成果無視」というのがある。大学との共同研究における、金に糸目を付けず、遂行し終わる期日設定もなく、出てくる成果も気にしない姿勢には閉口すると言ったのがあった。公益に資する気持ちがなければ、上記の3項目にはばかりの思いも出てこない。立派な建物が新築され、新しい施設設備が導入されても、それらを用いた次のオリジナルな成果につなげる工夫や思考がなければ効果は薄い。本来は研究成果がもたらす公益を含めた効果を念頭にプロジェクト申請が成されるのが本筋である。活発にやっていると言う活動の示威が表面に出でてくるべきではないか。金を積めば高額な機械や施設、設備は手に入るが、そのままでは永遠にそれらを購入し続けなければならない。タイ（あるいはアジア）・オリジナル・ブランドの開発が地域コミュニティの安定を促し、経済成長を促し、個々の収入増を成し遂げ、地域平和の安定維持にも貢献、資することを忘れてはならない。どうもこのあたりに問題の解決策が存在しているようであると言うのが筆者の認識である。やはり指導する側の自らの職務に対するプライドと自信、信頼感に満ちた尊敬に値する模範的姿勢が少なくとも必要であり、それらが継承されてこそ教育研究の実り豊かな収穫物としての人材育成が成就、達成される。重要なのは個々の研究者が **Pride** と **Dignity** をどれだけ認識して

居るかということである。